

JOY NOVELS

生島治郎

新婚刑事事件簿

犯罪ハネムーン



犯罪ハネムーン

昭和六十年三月三十日 初版発行

著者 生島治郎

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(五六二)二〇五一(編集)
〇三(五三五)四四四一(販売)

振替東京一―三二六 〇一〇四

支局 大阪市北区曾根崎二―十二―七

梅田第一ビル内

TEL 〇六(三一二)一五七三

印刷 大日本印刷 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えます

ISBN4-408-50038-0

©J. Ikushima 1985
Printed in Japan

新婚刑事事件簿

犯罪ハネムーン

生島治郎

実業之日本社

目次

女房暴走族

5

独りぼっちの女

33

四よとりになつた女房

61

デカとチンピラ

89

新郎逮捕

117

女プラス1じ

145

姦通刑事

173

拳銃ドロボー

201

装画・本文イラスト／中沢 潮

装幀／サン・プランニング

女房暴走族

「ああ、結婚生活って、こんなに退屈なものとは思わなかったわ」

とハネムーン一週間めの新妻にあるまじきつぶやきを、容子はついもらしてしまった。

旧姓牧村容子——今は青野純平の妻として青野容子と名前が変っている。

結婚前の彼女はフリーのルポライターで、いろんな事件を取材するために、ほとんど外を飛びまわっていた。

警視庁捜査四課の現職刑事である青野純平とはそういう事件をきっかけに親しくなり、ついに結婚にゴールインしたわけだが、結婚すると同時に、純平から今までの仕事をやめてくれと言われてしまった。

現職の刑事である立場上、たとえ取材のためとはいえ、女房があやしげな場所をうろつくのは困るというのである。

彼女は喜んでその求めに応じた。

彼女だって、愛する良人のためなら、どこへも出かけずに二人だけの愛の巣を築こうと決心した上での結婚だった。

それに、フリーのルポライターと言えば、いかにもカッコよさそうな肩書きだが、内情はいろんな事件のウラを探ってネタを出版社に持ちこむ下働きにすぎない。そのネタを元にして、原稿にするのはアンカーマンの仕事であって、彼女のような取材記者が自分のネタで原稿を書き、それが記事になるのは、ほとんど数えるほどのチャンスしかなかった。

女性が得意とする家庭向きの記事かファッション記事なら別だが、社会面を担当する、いわゆる硬派の記事では、仲々女性ライターが進出する機会とは与えられないのが実状である。

そんなわけで、彼女も割にあっさり自分の仕事に見切りをつけ、家庭に専念する気になったのだった。

ところが、いざ家庭の仕事に専念してみると、これ
が思った以上に単調きわまりない退屈な仕事であるこ
とがわかった。

彼女はそれまでの独身生活でも、掃除洗濯の家事は
きちんとやってきていた。食事の方は外食が多くなる
にしても、自分のアパートの中や身なりについては心
配りをしてきたつもりである。だから、結婚生活に入
っても、そのことは別段苦にならなかった。

むしろ、独身生活のときに手早く片づけるくせがつ
いているので、時間が余りすぎる。せめて、純平との
食事の時間を楽しみに、あれこれと料理を工夫しよう
と思ったのだが、結婚したとたんに良人は忙しくな
り、家で食事をする時間などほとんどなくなってしまう
った。

結婚式の翌日から、新婚旅行ではなく、純平はある
事件にかかりきりになったと称し、家へはあまり帰っ
て来ず、夫婦二人きりの水入らずの時間も持てない有

様である。

食事もつくらないですむとなれば、容子はますます
時間を持て余してしまふ。

そこでついつぶやいてしまったのだ。

「ああ、結婚って、こんなに退屈なものだとは思わな
かった……」

彼女のそのつぶやきが聞えたかのように、電話のベ
ルが鳴りひびいた。

電話でもいい。この退屈な時間がつぶせるものなら
——そんな気持ちで容子は受話器を取りあげた。

「はい。青野でございます」

「あんた、だあれ？」

受話器から疑い深そうな若い女の声が伝わってき
た。

「青野純平さんのお宅じゃないの？」

「そうです。あたし、青野純平の家内ですが……」

「なあんだ。純平さんは独身じゃなかったの。独身み

たいな顔してるから、てっきりそうだと思った」

若い女は不満そうに舌打ちした。

「オレ、あのおじさん気に入ってただけだな。女房持ちじゃがっかりしちゃうな」

「青野にどういふご用件でしょう？」

容子も思わず切り口上になった。

このところ、良人の純平は仕事だと称し、一向に家へ帰ってこない。その上、電話の女の話では、外では独身みたいな顔をしているらしい。これでは内心おだやかではいられなかった。

「別にどうってことないのよ」

女は鼻であしらうような口調だった。

「オレの名はギル。例のガンの心当たりがついたんだけど、おじさんがいないんじゃない話にならないな。またかけるよ」

それきり電話は切れてしまった。

容子は電話の意味がわからず、内心がもやもやし、

切れた受話器を欲求不満の眼つきでにらんだ。

そこへ玄関のチャイムが鳴る。

受話器を置き、玄関へ出ていって扉を開けると、純平が疲れ切った表情でふらふらと部屋の中へ入ってきた。

「ああ、疲れた」

大きなアクビをすると、べたつとあがりはなの居間の絨毯じゅうたんの上に腰を下ろす。

「一眠りしたら、また出ていかなくちやならんだ」

「お食事は？」

「いや、外ですましてきた」

純平はそのまま眠りこんでしまいそうな眼つきで容子を見上げた。

「すまん。とにかく、眠らせてくれ」

「その前に、ちょっと話があるわ」

容子は純平の前に正座して、きつと良人をにらんだ。

「今、若い女の人から電話があったのよ」

彼女はその内容を説明して、もう一度きつと良人をにらんだ。

「あなた、外ではまだ独身みたいな顔をして、女性とつきあっているんじゃないでしょうね？」

「バカなことを言うなよ」

純平はうんざりした顔つきで、ポケットから煙草をとりだして、火を点けた。

「おれがそんなことをするわけがないじゃないか。そのギルって女はね、一種の情報屋なんだよ。今度の事件で手がかりになりそうな情報をもらうために、おれが手なずけたハイティーンの女さ」

純平の話によれば、今、彼が手がけている事件とは、盛り場集まるロウティーンやハイティーンの連中に、ノルモという睡眠薬を売りつけていた二十五歳の女が殺された事件である。

その女は自分のアパートの中で、射殺されていた。

射殺される一時間ほど前に、薬を売ってくれとつきまといっていたハイティーンの暴走族らしい若者が重要容疑者と目され、警察では、目下、その行方を追っている。

「ギルって娘はね、新宿の暴走族やディスコ族の間では、けっこう顔なんだよ。だから、なにか情報がとれないかと思って接触していたんだ。あるいは、殺された女を射った手製の拳銃の持主がわかったのかもしれない」

「その女の人手製の拳銃で殺されたの？」

「どうもそうらしい。旋条痕の様子からみると、ちゃんとした拳銃ではなく、モデルガンを改造したものらしいんだ。そんなことをするのはハイティーンの拳銃マニアかなにかだろう。はじめ、拳銃で射殺されているところから、われわれは組織暴力団の組員の仕業ではないかと思ったんだが、改造拳銃らしいというのと、ハイティーンの暴走族らしい男という線から、こ

れは正規の暴力団の組員の仕業ではないというメドを立てた。拳銃いじりの好きなハイティーンの仕業にちがいない。ギルの言った『例のガンの心当り』とは、そういう男がみつかったということだろうな」

まずそうに煙りを吐き出し、どろんと濁った眼で純平は容子をみつめた。

「今度、そのギルって娘から電話があったら、必ず、おれに連絡してくれ。とにかく、今は眠くてたまらん。おれは寝るから、四時間後に起してくれ」

そのまま、寝室へ行くと、純平は服も脱がずにベッドに転りこみ、深い眠りに落ち入ってしまった。

そして、四時間後に容子が起すと、そそくさと顔を洗い、また出かけてしまう。

その女から二度めの電話があったのは、純平が出かけたあと、二時間ぐらい経ってからだった。

時刻は午前零時をまわろうとしていた。

「さっき電話したギルだけどさ、純平おじさん、い

る？」

容子は愛する良人が馴れ馴れしく純平おじさん呼ばわりされることにむっとしながらも、彼がいったん帰ってきて、また出て行ったことを伝えた。

「そうかア。そいつはマジイな。オレ、せっかくガンを持ってるヤツの仲間とコネつけたんだがな。いま、そのチャンス逃すと、やつは逃げちまうかもしれないだよな。純平おじさんがいりゃ、今、ここへ出張（でば）ってきてもらって、そいつが、本当にガンを持ってるかどうかたしかめてもらえんだけどな」

「じゃあ、あなたがいる場所を教えて……」

と容子は言った。

「あたし、青野にすぐ連絡して、そこへ出向かせますから」

「でも、三十分以内じゃないとヤバイよ。オレ、やつらの眼を盗んで電話してるんだからね」

ギルは自分はコマ劇場の切符売場の前に立っている

と言った。

「いいかい。三十分以内だよ。三十分過ぎたら、オレもここにはいらんないよ」

容子は電話を切ると、すぐに、純平に連絡しようとしたが、彼は外出中だとのことだった。帰ってきたら、すぐ連絡させると同僚が言ってくれたが、それではギルの指定した時間には間に合いそうもない。

容子はたちまちのうちに腹を決めた。

こうなったら、自分がギルに会うより仕方がない。

そう決心すると、妙に胸がわくわくしてきた。ルポライターをやっていたときに還ったみたいな胸の高鳴りだった。

容子が新宿コマ劇場の切符売場のところへ近づいたときは、午前零時半になりかかっていた。ギルが指定した三十分以内の時間にぎりぎりである。

切符売場の前には、短い髪を真赤に染めた小柄な若い女が、しきりにガムを噛みながらあたりをさりげなく見まわしていた。

容子はそのそばに寄って、そっとささやいた。

「あんたがギルさん？」

女はびくつとして、容子の方をふりかえり、眉をしかめた。

「おばさん、婦人警官かよ？ 純平おじさんのかわりに来たのかい？」

おばさんと呼ばれて、容子はムツときたが、この十七、八の若い女の眼から見れば、おばさんにちがいないと思ひ直した。六本木や新宿の若い男女の間では、二十すぎればもうオバンと呼ばれることは、ルポライターをやっていたから、よく承知している。

「あたしは婦人警官じゃないわ。さっき電話であなたとお話した青野の家内よ。青野とはどうしても連絡がとれなかったから、あたしが来たの。大丈夫よ。あ

たし、青野と一緒にいる前にはルボライターをやつていて、いろんな場所に入入りしたことがあるから、たいていのところには驚かない自信があるわ」

容子はせいぜい愛想よく笑つてみせた。

「青野のかわりにあたしをそこへ案内してちょうだい」

「へえ、あんたが純平おじさんの女房か」

小柄なギルは背の高い容子を仰ぎ見た。

「けっこうチャーミングなカミさんじゃないよ。おじさんも隅に置けないね。そう言えば、ちよつと年がイキすぎてるけど、サマにはなってるわ。でも、ヤバいことになつてもオレは知らないよ」

「いいわよ。覚悟はできているわ」

そういう連中の中に溶けこめるような化粧の仕方とそれなりの服装を、容子は選んできたつもりだった。

「で、その男とはどこで落ち合うの」

「ま、あわてなさんなつて」

ギルはベツと囁んでいたガムを吐き出し、かわりに煙草を口にくわえた。

「純平おじさんなら警察手帳にものを言わせることもできるけど、あんたじゃそういうわけにはいかないね。だから、仲間といふことにしなきゃなんないけど、年がちがうから、それなりの理由を考えなくちゃ……」

容子を観察するように、じろじろ眺めてから、くんとひとつうなづく。

「そうだ。あんたをヤクの売人といふことにして、そいつに紹介しよう。たしか、殺された女もあんたぐらの年で、ノルモの売人だったからね。その線でやつがひっかかるかどうかためしてみな」

バッグの中から、五、六錠の薬を取り出すと、ギルは容子の方へさしだした。

「こいつがノルモだよ。こいつを吞むと、手脚がしびれてかつたるくなり、とてもいい気分になれるんだ。オレはあまり好きじゃなくて、つきあい程度にやるだ

けだけどね。こいつをあんたに売ってやるよ。一錠千円でいいや」

ずいぶん高い薬だなと容子は思ったが、言われるままに、五千円をとりだし、その薬を五錠分けてもらった。

「じゃ、行くか」

ギルはぶらぶらと歩き出した。

新宿の歌舞伎町まで歩き、呑み屋街の中を通りぬけたところに、七階建てのビルがひっそりと立っていた。

二階から上は住宅で一階だけが商店という下駄ばきアパートである。もうそのビルの灯はすっかり消えていたが、一軒だけ右端のスナックが店を開けている。

ギルはそのスナックの中へ入っていった。スナックの内部はウナギの寝床みたいに細長く、右はカウンタ―になっていて、左は人が一人ようやく通れるほどのスペースしかなかった。

カウンターの中には、頭の禿げ上った老人がワイシャツに蝶ネクタイ姿でグラスを磨いているきりで、客の姿は見えない。

「おっさん、連中はいるかい？」

ギルが訊くと、老人はものも言わず、ただ禿げ頭をぐいと奥へしゃくってみせた。

「じゃあ、入場料はここへ置くよ」

ギルは千円札を一枚カウンターの上に置き、容子に目配せをする。

容子はその意味を悟って、同じように、千円札を一枚カウンターの上に置いた。

二人は店の中を通り過ぎ、奥の扉を開ける。そこは廊下になっていて、さらにその向い側にある扉を開けると地下室へ降りる階段が見えた。

「ここがオレたちの溜り場になっているのさ。仲間が集って、いろんなわるさをやるんだけど、ここなら、外へもれる心配はないからね」

と階段を降りながら、ギルは説明した。

「もし、変なのが入ってくるようなら、さっきのおっさんが合図で知らせてくれることになっている。この地下室はおっさんの持物で、そのために、入場料として千円ずつふんだくってやがるんだ」

階段を降り切ると、そこは十畳ほどの広さの地下室だった。

煙草の烟りと人いきれでむっとする空気がたちこめている。

中には十人ほどの若い男女がいて、ディスコ・ミュージックのリズムに合わせてそれぞれに踊り狂っている。

地下室の隅には、ポリウムを一杯にあげたカセツトデッキが置いてあった。

「近頃じゃ、新宿でも、ディスコは十一時半で終りだもんね。頭にきちゃう」

とギルが容子の横でつぶやいた。

「だから、オレっちはここをディスコがわりのシヨバにして、欲求不満を解消してるってわけ」

容子はなるほどと思った。ディスコから連れだされたハイティーンの女性がひどく残忍な殺され方をした事件が起つて以来、警察はディスコの営業が十一時半以後もつづけることを厳しく取り締まっている。

そのために行き先のなくなった若者が新宿や六本木の街にあふれている実態は、テレビでも報道されたりだった。

警察が取締りを強化したおかげで、こういうアングラ・ディスコがはやり出したのだろうと容子は思った。

「ここにいるのは、たいてい、オレっちの仲間だけださ。一人新入りがいるんだ」

とギルは言った。

「そいつがノルモが欲しいって言ってやがって、しかも、ハジキを持っているらしいんだ。そこで、純平お

じさんのところへ電話をしたんだよ。ノルモが買えないとわかりゃ、どこかへヤクを探しに行くに決っているから、気が気じゃなかったよ」

「その男はどこにいるの？」

容子が訊くと、ギルは隅の方で腕を組み、壁にもたれている男を眼で示した。

「あいつだよ。ついてきな。今、紹介してやっから」

若者たちの踊りの渦の中を、ギルは器用に身体をかわしながら、すいすいと壁の隅へと渡っていく。

容子はあわてて後を追ったが、ギルのように器用なわけにはいかず、何度か踊っている男女にぶつかってにらみつけられた。

それでも二人は部屋の隅に辿りつき、男に近づいた。

年の頃は十八、九だろうか、頭をリーゼントスタイルにし、今流行の小さなサングラスをかけ、いかにもつつぱったふうに、唇から煙草をぶら下げ、腕組みを

して、壁にもたれている。

顔にはニキビが一面に吹き出しているが、体格が大人以上で、背は一メートル七十五ぐらいあり、肩はばもがつしりしている。汗がところどころしみ出したブルウのTシャツには、たくましい筋肉が浮き彫りになっていた。

「あんた、ノルモが欲しいんだってね」

ギルが声をかけた。

「だったら、このオレの仲間が手に入るってさ」

「おめえのダチが？」

若い男はサングラスを外して、容子の方を見た。ちっこい眼だが、油断のない輝きを帯びていた。

「このオバンがおめえのダチだって言うのかよ」

「年のことはどうだっていいだろう」

ギルが胸を張り、つつかかるような口調で言った。

「オレもこのオバンから、しょっちゅうヤクを分けてもらっているから仲よくなったのさ。だから、あんた